

新聞と「昭和」

本書は二〇〇八年刊行さうに、明らかに誤った報道された『新聞と戦争』に続くものがと思いきや、実は昭和のこの検証の目的の一和という時代を描いた報道の検証である。全二八章の構成中、前半部の二四章までが戦前編、後半部が戦後の日本社会をめぐる事件を朝日新聞がどう報道したかの検証でつづられている。「ジャーナリストは歴史の目撃者」であり、時代の証言者であることは間違いないが、それらを検証することとを目的として朝日新聞夕刊版に連載された記事「検証・昭和報道」(二〇〇九年三月〜二〇一〇年三月)を単行本化したものである。

◆意義深い公刊◆

昭和という時代を描いた報道の検証

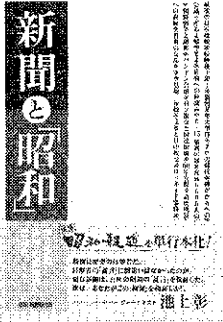
鈴木雄雅

連載を始めた二〇〇九年は朝日が創刊されて一三〇年、そしてその歴史の半分が昭和という時代であったことが本書の刊行の意図であったとしても(まえがきにかえて)、社史とは別にこのような検証を行い公刊することは、意義深い。

その結果、一九四五年以前の戦争中、あるいは「非常時」におけるジャーナリスト事件(第25章)のよ

時におけるそれとてのよである。そのような社会的うな違があるのか、ない状況を、ジャーナリズムのなかであるう。その分岐点チェック機能が「上から目界の日本」から「日本の世」シンボジウム 検証・七社共同宣言(第18章)に描かれているような、朝日新聞社としての転向(方針転換)はその事実のみで非難することはできない。そこに「『権益』が社論の力ギエという解釈」という観点が見えにくい。「世界との共生こそが『平和の条件として訴えているもの(船橋洋一 一五七四頁ほか)、朝日新聞の使命を遂げるジャーナリズムの理念を打ち出してほしかった。(すずき・ゆうが氏)上智大学文学部教授・新聞学専攻)

いた一九四〇年元日の天声(一)日報道に従順してしま人語(二二八頁)ともみなったところに大きな問題をさるかもしれないが、実際抱えていたのではないか。には満州事変(九三二年)しかしながら、産めよ殖あたりから軍が爆走し始めやせよ(第9章)から国民ていたのは紛れもない事実と兵に立たん(まえがき



四六判・592頁・2415円
朝日新聞出版
978-4-02-250747-1